

特集 「立教科目」：特色GP申請書

■大学・短期大学名	私立 立教大学
■取組名称	「立教科目」－建学の精神から学ぶ科目展開
■取組単位	大学全体
■取組担当者	全学共通カリキュラム運営センター 部長・理学部教授 山本 博聖
■キーワード	1. 建学の精神 2. 教養教育 3. カリキュラムの点検・改善システム 4. ゲスト・スピーカー制度 5. 履修支援

1. 大学の概要

立教大学は、1874年にアメリカ聖公会の伝道主教が東京築地の外国人居留地に英学と聖書を教える私塾を開いたことを起源とする私学である。現在、7学部11大学院研究科、学生数約15,000名を抱え、東京都豊島区と埼玉県新座市にキャンパスを有する。

創立以来、「建学の精神」に「キリスト教の精神にもとづく人格の陶冶」を掲げ、知育・徳育をともに重視する高等教育機関として「自由の学府」を称して発展してきた。

この「建学の精神」に則り、専門教育と等しく「人間としての基本的なあり方」を問いかける教育を行ってきた。即ち、一人ひとりの個性を尊重し、社会の一員としての自覚や責任を学び、それぞれが人生の途上で出会った他者や文化・社会との交流を大切にしつつ、「現代社会における人間性を問う」を重視したより普遍的な教養教育である。

こうした教養教育の重視は、我が国

の私立大学の中では例外的に早い1955年に一般教育部が設置されたことや1954年に学生部による立教キャンプが開始され、今日に至るまで、自己の理解と他者への理解を促す正課外教育プログラムが数多く実施されてきたことに表れている。

現在、教養教育の中核は、1997年度から実施されている「全学共通カリキュラム（以下、全カリ）」によって担われている。全カリは、本学の学士課程の教育目的である「専門性に立つ教養人の育成」の達成のために、全学部の参画と責任のもとに運営されている。

このように、本学は、130年余の伝統によって培われた「建学の精神」を礎とする学生の全人的成長を重視した教育を実践・蓄積してきており、これらを糧とし、時代や社会からの負託にさらに対応べく、不断の教育改革に取り組んでいる。

2. 本取組の概要

「立教科目」とは、立教大学の建学

の精神が問いかける「人間としての基本的なあり方」を考え、学び、行動へと学生を誘う科目群であり、全学部全学年を対象とする教養教育課程において、2001年度から開講されている。

「立教科目」は、建学の精神から導かれた倫理性、社会性、人間性を培う「宗教」「都市」「大学」「人権」の4つのテーマを設定している。これらの設定は、必修科目を置かない立教大学の教養教育課程において、学生の主体的な科目選択を促す履修支援の機能を果たしている。また、授業方法の特色として、ゲスト・スピーカー制度を導入し、専門家や実務家を招請し、リアリティを高める工夫を凝らしている。

今後は、カリキュラムの点検・改善システムをさらに活用し、テーマを8つに広げるとともに、建学の精神に関わる正課・正課外の諸活動との連携を一層深めていく。

3. 本取組の実施プロセス

(1) 教養教育の改革—「専門性に立つ教養人の育成」を目指した全学共通カリキュラムの発足

本学は、「キリスト教の精神にもとづく人格の陶冶」を「建学の精神」とし、専門教育と並んで教養教育を重視することによって、その実現と充実のために絶えざる改善と努力を積み重ねてきた。本学は、この「建学の精神」に則り、新たな教養教育として、1997年度から全カリを全面实施し、あわせ

て学士課程の教育目的を、従来の「教養ある専門人の育成」から「専門性に立つ教養人の育成」へと転換した。「専門性に立つ教養人」とは、グローバルな課題と社会的要請に対応し、広い視野に立って課題を発見・解決できる能力を持つ人間のことである。

全カリは、1991年7月の大学設置基準の大綱化を受けて、同年10月に「全学カリキュラム検討委員会」を設置したことに始まる約5年半にわたる全学的な議論を経て生まれた。また、全カリは、全学部の参画と責任のもと組織された「全カリ運営センター」によって運営されている(図1)。

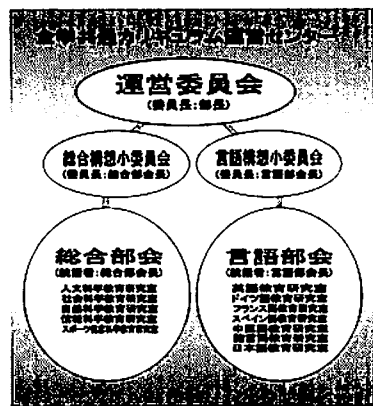


図1 全カリ運営センターの組織

(2) 広い視野と判断力の育成にもとづく総合的な知性の涵養を目指す科目編成の実現

全カリは、言語教育科目と総合教育科目(以下、総合科目)から構成されている。このうち、総合科目は、言語

教育科目や専門教育の学習と補い合いながら「広い視野と判断力の育成にもとづく総合的な知性の涵養」を教育目的としている。すべての科目が全学部全学年を対象とし、半期制で開講され、卒業要件単位数は全学部ともに20単位である。

総合科目は、「総合A群」「総合B群」「情報」「スポーツ」の4つの科目群によって、カリキュラムが組み立てられている。

特に、総合A群は、広い視野と判断力の育成のベースとなる科目である。一般教育課程の「人文」「社会」「自然」の学問分野別科目から、総合化が図れるよう「思想・文化」「歴史・社会」「芸術・文学」「環境・人間」「生命・物質・宇宙」「数理」の6カテゴリーからなる主題別科目編成としている。

(3) 毎年実施のカリキュラム点検・改善システムによる課題の発見

全カリ発足から1年半が経過した1998年後半に、「全カリ運営センター」の「総合教育科目構想小委員会（以下、小委員会）」において、学生の履修状況のデータにもとづいた総合科目のカリキュラム点検が行われた。

その結果、学生の履修の傾向として、学年が上がるにつれて期末試験の受験率、単位修得率が低下している傾向が明らかになった。

あわせて、同年10月に大学審議会から出された「21世紀の大学像と今後の

改革方策について－競争的環境の中で個性が輝く大学－」と題された答申に関連して、全学部全学年を対象とした全カリ総合科目の特性をさらに活かし、本学の個性を表わした科目や時代・社会のニーズを反映した科目を展開することができないかとの意見が複数の学部選出委員から出された。

(4) 「立教科目」の誕生

この点検を受けて、小委員会は、全カリ発足から4年が経過する2001年度からの実施を目指し、本学の個性を表わし、時代や社会のニーズに対応した魅力ある科目の設置を講ずることによって、学生の主体的な科目選択と学生の学習意欲を高めることを目的としたカリキュラムの改善の方針を決定した。

続いて、小委員会は、上記方針を具体化するワーキンググループ（以下、WG）を設けた。WGでは、「立教らしさ」を表わした「テーマ」のもとに、「建学の精神」の現代的意義を具現化した科目を設置することによって、学生の本学の構成員たる意識を高め、主体的に科目選択できるようなカリキュラムとするアイデアが生まれた。

さらに、WGにおいて、1999年後半から2000年前半にかけて、具体的な「テーマ」や科目について検討が行われた。その結果、キリスト教（＝「宗教」）を「建学の精神」とする「都市」型「大学」という本学の個性を反映した「宗教」「都市」「大学」に、これま

で本学が特に力を入れてきた「人権」を加えた4つの「テーマ」に沿った科目を配置し、全体を「立教科目」と称して総合A群のなかで展開する実施案がまとまった。この提案は、最終的には本学の最高意思決定機関である部長会において承認され、2001年度カリキュラムから実施されることになった。

4. 本取組の特性

「立教科目」は、「建学の精神」が問いかける「人間としての基本的なあり方」を、現代社会における諸課題に即して考え、学び、あるいは行動へと誘う科目群である。

したがって、キリスト教の教義や文化、歴史を学ぶにとどまらず、広く「現代社会における人間性を問う」授業科目としての特徴を持ち、それゆえに全学生を対象に展開され、学生が立教大学で学び、人生を主体的に選択しつつ生きる力を育むことに寄与する。

このような「立教科目」は、宗教が「建学の精神」の礎である大学のみならず、現代的・社会的課題に対して学生が自主的に取り組むことを期待する大学にとっては、「人間としての基本的なあり方」を大学の理念に遡って考えさせる取組の事例として参考になる。

(1) 4つのテーマと豊富な科目展開

「立教科目」は、キリスト教にとどまらず他の宗教までも含めた「宗教」

と、学生が人間的に成長する上で本学が重要視している「人権」といった建学の精神に根ざすテーマと、本学の環境上の特性である「都市」、さらに本学学生としての認識と意欲を高めて学習を動機づける「大学」という4つのテーマで構成され、主として、「人権」では人間性を、「都市」「大学」では「社会性」を、「宗教」では「倫理性」を培うことを教育目的としている。(表1、表2)

2005年度は、26科目32コマの展開となっている。

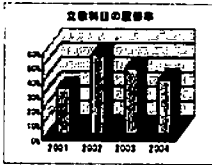
また、これまでの延べ履修者数は、2001年度が4,596名、2002年度が8,102名、2003年度が6,804名、2004年度が5,587名となっている。この総数から、開講以来、毎年3人に1人は「立教科目」の履修経験を有していると言える。(図2)

なお、2003年度から履修者数が減っているように見えるのは、履修者を適正規模にするための履修制限によるものである。

「宗教」 (倫理性)	「都市」 (社会性)
基督教とキリスト教 マインリチアと宗教 現代社会と宗教 日本教会とキリスト教 外国教会とキリスト教 生命倫理とキリスト教 性倫理とキリスト教	地元の歴史 都市と教養 立戸と文学 私生活と倫理 都市と環境 都市の自然 自然環境のまち 都市と新しい社会活動
「大学」 (社会性)	「人権」 (人間性)
大学とミッション 日本の大学世界の大学 大学と現代社会 立教大学の歴史	人権教育の展開 日本文化の発展 現代社会と人権 国際化の中の学生 マインリチアの改革 芸術創作と人権 シェンゲン・ヨーロッパ

表1 立教科目一覧(2005年度)

年度	専攻 専攻数	立教科目 履修者数	立教科目 履修率
2001	14,825	4,534	30.6%
2002	15,553	8,102	52.1%
2003	15,110	8,804	58.3%
2004	14,840	5,587	37.6%



※2001年度は、専攻の人数を専攻数として算出
 ※2002年度は、専攻の人数を専攻数として算出

図2 立教科目の履修者数・履修率

(2) 「生きた教材」を用いたリアリティある授業展開 ～ゲスト・スピーカー制度～

「立教科目」では、個々の授業の充実や多様化を図るため「ゲスト・スピー

カー制度」を設けている。この制度は、科目担当者が、専門家や実務家を「生きた教材」として招請し、ゲスト・スピーカーとして具体的な事例や体験談を学生に語ることによって、学生の学習効果を高めることを狙いとしたものである。また、ゲスト・スピーカーにとっても、学生からの質問や意見交換を経験し、科目担当者が責任を持ちつつも授業の重要な担い手となることで新しい発見をする機会になっていると

「日本文化の発展」(人権)

- 1) 神皇の御誓、御誓字とは何か。
- 2) 最近の日本文化論・文明論について。
- 3) 神道問題とは何か。
- 4) 皇統族別の歴史と日本人像。
- 5) 神宮の存在意義、歴史に見る「役」。
-
- 9) <争論>の文化、医学、生活文化など。
- 10) 差別と歧视、差別と差別の区別。
- 11) 日本の伝統芸能と部落問題。
- 12) 貧窮人の世界、祝福祭の発生。
- 13) 消失された文化、麓・山・山村と部落。
- 14) 日本文化の体系、アイデンティティを問う。

「漁業の歴史」(都市)

- 1) 豊島区漁業の人文地理(名所・場所など)
- 2) 漁業の歴史(漁業村から漁業団体化へ)
- 3) 豊島区の有形・無形文化財
- 4) 古く豊島部の歴史地理(保理と官道)
- 5) 豊島氏の成立と活潑
- 6) 豊島区周辺の中世伝承
- 7) 豊島氏の滅亡と村落の成立
- 8) 小田原北条氏の江戸朝支配
- 9) 近世地誌から見た豊島区
- 10) 近世の信仰(寺社・庚申塔・富士塚)
- 11) 近代史(学園都市とヤミ市)
- 12) 昭和史(アトリ正付ととさね荘)
- 13) 「漁業学」のすすめ

「立教大学の歴史」(大学)

- 1) はじめに一大学史を学ぶ
- 2) 近代日本におけるキリスト教伝道と聖公会
- 3) ウィリアムズ主教と立教学校の創立
- 4) 文部省訓令第12号と立教学院
- 5) 池袋移転と大学昇格
- 6) 関東大震災と立教学院
- 7) 昭和初期の立教大学
- 8) 日米開戦と立教大学
- 9) 敗戦から再建へ
- 10) 新制大学への移行とその後の展開

「生命倫理とキリスト教」(宗教)

- 1) 導入：生と死をめぐる今日の諸問題
- 2) 科学の生命観とキリスト教の生命観
- 3) 医療・倫理・宗教
- 4) 命のはじまり：胚の地位をめくって
- 5) 人工授精・体外受精
- 6) 人工妊娠中絶と出生前検診
- 7) 命のおわり：死の定義
- 8) 臨死と臓器移植
- 9) 安楽死と尊厳死
- 10) 命をめぐる権利：自殺、死刑など
- 11) 伝統と変革：生命倫理へのキリスト教的視点

表2 立教科目のシラバスの例(抜粋)

好評である。授業という「場」で、科目担当者、学生、ゲスト・スピーカーが双方向性に富む関係をもつことは、新たな知の創造へと繋がるであろう。

科目担当者は、全体の授業計画のなかにゲスト・スピーカーをどう位置づけているのかを明らかにする「ゲスト・スピーカー提案書」の提出が義務づけられ、審査の上、登壇が認められる。このことによって、ゲスト・スピーカー制度における教育の質を確保している。

本学での「ゲスト・スピーカー制度」は、「立教科目」での実績と評価とを踏まえ、2003年度から全学的に導入されることとなった(表3)。

2005年度前期 ゲスト・スピーカーの例

「池袋の歴史」

：豊島区立郷土資料館学芸員

「都市と新しい社会運動」

：NPO法人「ナマケモノ倶楽部」事務局職員

「ジェンダー・バイアス」

：NPO法人「思春期相談室TEENS POST」代表

表3 ゲスト・スピーカーの例

(3) 学生の主体的な科目履修への支援

① 「大学案内」「履修要項」に、「立教科目」であることが目立つよう、科目名の頭に「R」(印)をつけている。「R」は「Rikkyo」の頭文字である。

② 1993年度から、学生の「人権」に関する意識を高め、主体的な学習を促すため、全学部を対象に「人権」に関連のある科目の「科目リスト」を作成

し、新入生全員に配付している。「立教科目」の「人権」テーマ科目も掲載されている。

③ 1999年から、本学で開講されている全科目のシラバスをWebで閲覧可能とし、キーワードによってシラバスを検索できるシステムを導入している。

<http://wwwj.rikkyo.ac.jp/kyomu/>

④ 学生が履修計画を作成する上で必要な助言を専任教員から受けるアカデミック・アドバイザー制度を設けている。

⑤ 「立教科目」から発展し、総合B群の中に学生部提案の「自己理解・他者理解」やチャペル提案の「信じること、生きること」などが開講され、さらにこれらと連携した、正課外教育プログラムが多数実施されている(表4)。

(4) 教育活動の継続的公開 ～学生の姿が見える情報発信～

全カリでは、1) 学内に対する啓発・情宣活動、2) 全カリにおける成果やデータの蓄積とその全学的共有の保証、3) 大学教育のあり方、授業のあり方、学生の学びの姿に対して問題提起を行うために、シンポジウムの開催と広報誌の発行を行っており、これらの媒体を通して「立教科目」の情報公開を行っている。

① 「シンポジウム」

年1回、教育に関するテーマを取り上げ、学外有識者による講演や教職員、学生との意見交換の場として提供し、

全カリ活動を評価・検証を行う機会として成果があがっている。

② 「大学教育研究フォーラム（写真1、表5）」

現代的教育課題を特集とした論考や、シンポジウムの開催記録、授業の現場を扱う「授業探訪」などで構成され、大学教育を取り巻く状況と、本学の教育の現状と成果を共有することを目的として発刊している。教職員、学生、大学関係者・マスコミ等に配布している。（年1回1,000部）

③ 「ニューズレター」

全カリ活動トピックや将来展望などを周知することを目的に発行され、教職員、学生に配布されている。（年2回、各3,000部）

* 「大学教育研究フォーラム」「ニューズレター」は、下記ホームページでも公開されている。

<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/zenkari/>

④ 「ホームページ」

本学を目指す受験生、広く社会一般に対して「おもしろ授業」と題した学生による授業レポートや上記の広報誌を掲載しており、ここでも「立教科目」が取り上げられている。

* 「おもしろ授業」ホームページ

http://www.rikkyo.ne.jp/grp/kohoka/univinfo/gakubu/index_class.html

部局名	掲載内容
1 学生部	<input type="checkbox"/> 「新入生キャンプ」n部局（山梨県庁前） <input type="checkbox"/> 「体験体験」（遊学風潮前編後編） <input type="checkbox"/> 「セントポールズ・スポーツフェア」
2 チャペル	<input type="checkbox"/> 「奥中山ワーク・キャンプ」（遊学風一戸町） <input type="checkbox"/> 「遊学風潮キャンプ」（遊学風一戸町） <input type="checkbox"/> 「日曜キャンプ」（東海）
3 ポランティアセンター	<input type="checkbox"/> 「災害救済ボランティア活動」 <input type="checkbox"/> 「環境ボランティア活動」 <input type="checkbox"/> 「ノートタイク・手紙贈答会」
4 シンポジウム	<input type="checkbox"/> 「公開講座」 <input type="checkbox"/> 「学生インターセッション」 <input type="checkbox"/> 「Gom」（ニュースレター）、「年報」の発行
5 人権センター	<input type="checkbox"/> 専学人権週間プログラム推進会「推進会の趣旨一貫性をもっと意識だし、人をもっと愛したい」 <input type="checkbox"/> 専学人権週間プログラム推進会「専学領域に在りける人権一日を決定せよ」

【出典】RIKKYO HANDBOOK 2005

表4 主要な正課外教育プログラム

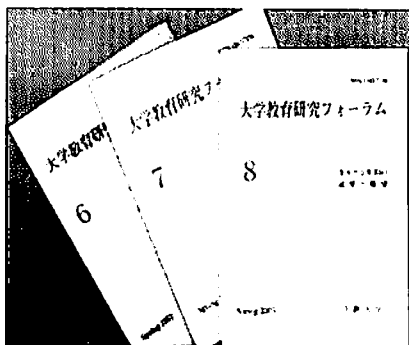


写真1 「大学教育研究フォーラム」

<各年度の特集テーマ>	
1985 (H7)	大学教育改革
1986 (H8)	普通教育改革
1987 (H9)	総合教育改革
1988 (H10)	全カリと専門
1989 (H11)	学生アンケート
2000 (H12)	進化する総合B
2001 (H13)	大学間交流元年
2002 (H14)	全カリ5年間の成果と課題
2003 (H15)	教育探訪、それは可能か?
2004 (H16)	外部評価報告

表5 「大学教育研究フォーラム」の各年度の特集テーマ

4. 本取組の組織性

(1) カリキュラム運営組織「全カリ運営センター」

「立教科目」は、「全カリは全学で支える」との理念のもとに、全学部の参画と責任において組織された「全カリ運営センター」の中の「小委員会」によって運営されている。

小委員会は、総合科目の基本方針、カリキュラム、シラバス、授業方法、授業形態、教員配置等について検討し、実施案を運営委員会へ提案するとともに、現在実施されているカリキュラムを点検・評価することをその役割としている。

「総合教育科目担当部会（以下、担当部会）」は、運営委員会、小委員会によって定められた基本方針にもとづき、シラバス、授業方法、授業計画、教員配置等を立案し、小委員会に提案することをその役割としている。

以上のように、本学においては、教養教育が常に各学部の連携のもとに運営されていることから、カリキュラム編成において柔軟性が生まれ、その成果として、本取組の「立教科目」が開講されることになった。

(2) カリキュラムの点検・改善システム

小委員会では、履修者数や成績などの教務データにもとづくカリキュラムの点検を行う他、外部有識者による評

価、学生による授業評価アンケートなどの多面的な評価を受け、カリキュラムの開発・改善を常に行うことが可能なシステムが確立されている（図3）。

また、科目担当者連絡会や、シンポジウム、ワークショップなどを開催し、FD活動を積極的に行っている。

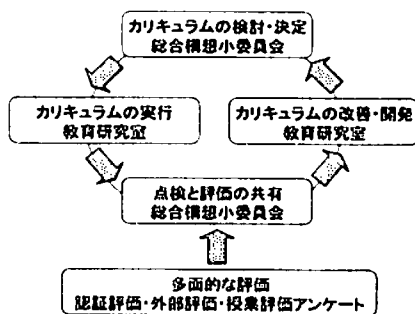


図3 カリキュラムの点検・改善のサイクル

(3) 「立教科目」への財政支援

- ① 「立教科目」にはゲスト・スピーカーの招請のための費用が保証されている。
- ② 「立教科目」には展開科目のすべてに兼任講師コマ枠が配当されている。
- ③ 全カリ運営センターには、FD諸活動費用（アンケート実施・教材開発・ワークショップ・研修会への参加費用など）が保証されている。
- ④ 全カリ運営センターには、教務事務とは別に専任職員（4名）による独立した事務部門がおかれ、カリキュラム開発のための支援を行っている。

5. 本取組の有効性

(1) 立教科目の特徴がうかがえる「学生による授業評価アンケート」

2004年度に実施された「学生による授業評価アンケート」は、各項目を5段階で評価したものである。図4は、「立教科目」と「立教科目」以外の全科目とを比較したものである。表6は、学生による自由記述の代表的な例である。

この結果から、「立教科目」の平均値は、全学の平均値に比べ、評価が有意に高いことがわかった。同アンケートは今回が初回の実施であるため、今後の数値の推移に注視したい。

(2) 立教科目の効果がうかがえる「大学環境調査」

「大学環境調査」は、1972年から4年に一度実施している本学独自の調査である。図5における評価に毎回変化があり、これらは1997年度の全カリ充足、2001年度の立教科目の開講などに対応しており、本学の教育改革の成果が着実に表れていることがうかがえる。

(3) 2004年度大学基準協会による認証評価

本学は、2004年度に、大学基準協会から「同協会の大学基準に適合している」との認定を受け、評価結果を受け取った。本取組の「立教科目」に関しては、以下の評価を受けた。

① 「全学共通カリキュラム」は、大学の独自性を表す科目も含む総合A群や、学際的なテーマを取り扱う総合B群等に分けられ、よく工夫された科目群である。

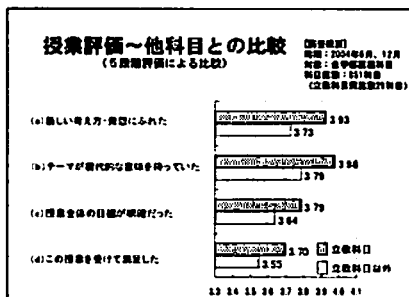


図4 学生による授業評価アンケート

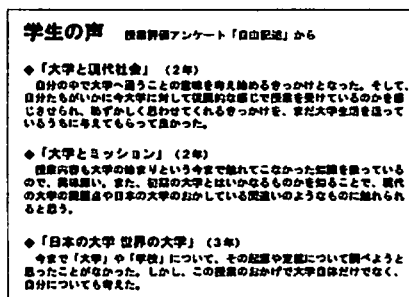


表6 学生による授業評価アンケート

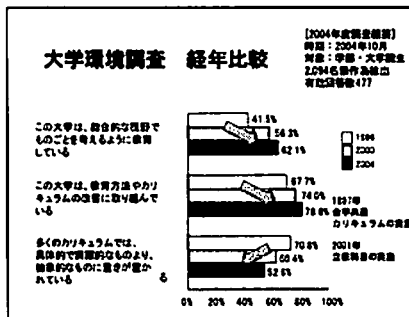


図5 大学環境調査

② 「全学共通カリキュラム」は総合A群や総合B群等に分けられ、総合A群はさらに大学の独自性を表す科目や時事的話題等に印をつけることで、選択する学生にとって分かりやすく配置されている。また、総合B群も大変工夫された科目群である。

(4) 2004年度外部有識者による評価

全カリ運営センターは、2004年度に、6名の外部有識者による「外部評価」を受けた。総合科目担当の委員から、「立教科目」に関しては、以下の評価を受けた。

① 教育課程の全面的再編が進められて、「立教科目」「時事科目」というユニークな科目群を含む「総合A群」と、学際的な授業展開を前提とした「総合B群」へと実現していること。(A氏)

② 「総合A」について、6分野に分けられ、しかも「立教科目」と「時事科目」を明示して、多数の授業科目が準備されていることは、壮観であり高く評価される。(B氏)

③ 「立教科目(R科目)」など建学の精神につながる独自の科目群を設定し、立教大学としての特色性をアピールしていること。(C氏)

6. 将来展望

(1) 「立教科目」テーマの拡充 - 4テーマから8テーマへ

2006年度からの「立教科目」は、従来の「宗教」「都市」「大学」「人権」

の4テーマに、21世紀の人類の課題である「他者との共生」を学ぶことが教育目的の「環境」「平和」「いのち」「ウエルネス」が加わる。新「立教科目」は、「人間性」「社会性」「倫理性」「他者との共生」を培う科目群として、さらに個性豊かな科目として展開される(図6)。

(2) 教養人に不可欠な学問リテラシーを学ぶ「立教生の学び方」

2006年度から「立教生の学び方」と題した定員30名の科目を開講する。特定の「テーマ」を深めることでスタディスキルを身につけ、学部や学年の垣根を越えた専門領域にとらわれない広い視野をもち、相手の意見を尊重し、自分の意見を主張できる能力を高める。

(3) 「建学の精神」に触れる活動の「場」

「立教科目」を修得した学生を「建学の精神」に関わる大学行事へと積極的に誘う。学生の意欲に配慮し、大学行事の「学生アドバイザー」として活躍させるなど、学生参画を大学として推進する。まず、履修相談、オープンキャンパスの進学アドバイザー、キャンパスツアー、保証人会・校友会行事などの「場」が用意できる。

(4) 「建学の精神」を体得する全学的な支援体制の整備

本学には、人権センター、セクシュ

アル・ハラスメント防止対策委員会、身体しょうがいしゃ支援ネットワーク、ジェンダーフォーラム、ボランティアセンター、チャペル、学生部、診療所など、人権、偏見・差別、障害、健康、ジェンダー、環境、信仰、ボランティアなどに関する活動を通じて、「生きた現場」へ学生を誘い、他者との出会いの中でいのちの尊厳に触れる教育活動を実践してきた伝統がある。

この実績に基づき、本学は2005年2月「ヒューマン・コラボレーション宣言」を採択した。これは、学内諸活動

のネットワークを強化し、それぞれのリソースを活かし「『いのちの現場』に立った人間教育を行うヒューマン・キャンパスを目指す」ことの決意である。

「ヒューマン・キャンパス」では、「立教科目」を修得した学生が主体的な学びを持続させようと主体的に様々な正課・正課外教育活動に触れ、体験的に学ぶための豊富な機会を活用し、自主的に双方向型のフィールド・エデュケーションを実践することが可能となる。

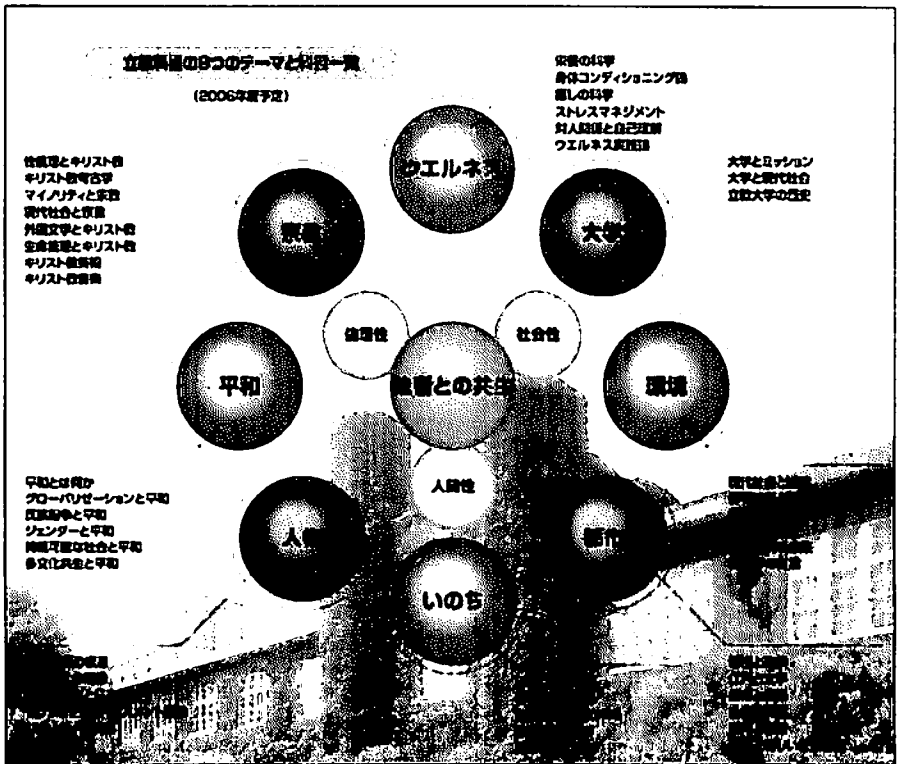


図6 立教科目の8つのテーマ